

一村一品活動

— クルグズスタン・タスマ村の挑戦 —

三 好 弘 矩 *

クルグズスタンの首都ビシュケクから東に車で半日ほど走ったところにタスマ村がある。この村では村人と JICA 青年海外協力隊の隊員が石鹼作りに励んでいる。

クルグズスタンは自然が豊かであるが、タスマ村では特にそう感じた。村人は馬や牛、羊たちとともに生活し、時間がゆっくりと流れている。村からは美しい山々（天山山脈）が見え、空気が澄んでいる。夜になると満天の星空を拝むことができる。

しかし、この村にもソ連崩壊の波が押し寄せている。400 世帯、1,500 人ほどの村には学校、病院、役場といった最低限の公共施設しかなく、老朽化が進んでいる。村に水を供給している水道局はうまく機能しない時期があり、しばしば断水が発生する。村には仕事が少なく、それに関連しているのか飲酒が増え、家族や他人への暴力、健康問題を訴える人が多い。クルグズスタンがソ連というひとつの国に属していた頃には、このような問題は比較的少なかったといわれている。そのような中、この村にも JICA 青年海外協力隊の派遣が決定された。

私は 2011 年のフィールド調査でこの村を訪れ、隊員の N さんに会った。N さんは

2010 年から 2012 年まで村落開発普及員という職種でこの村に派遣された。村での活動について尋ねると、「村落開発普及員としての活動内容は、その多くが個人の裁量に委ねられています。私は赴任前から、女性の村人にターゲットを絞り、彼女たちにも手に職をつけてもらうことで生活の安定を図るとともに、より豊かな人生を送ってもらいたいと考えていました。具体的には、一村一品運動の一環である石鹼作りを通じてこれを実現しています」と、強い意志をもって述べた。

2010 年 5 月、村人の女性（主婦）5 名と隊員 1 名によるメンバーが立ち上がった。仕事場の確保と活動資金（資本）の借入れ、石鹼を作るための道具と材料の準備を済ませ



写真 1 一村一品のメンバー

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真2 石鹼作りの様子

ると、石鹼の試作が始まった。はじめは通常の石鹼、つまり苛性ソーダを含んだ石鹼を製作、販売していたが、市販の石鹼との差別化を図り、「これぞタスマ村の石鹼」という付加価値を設ける観点から、村で自生しているアラバタという薬草（シロザの一種、日本では薬草というより雑草）を用いた石鹼（アラバタ石鹼）作りをすることになった。この石鹼、もともとは村で広く使われていたのだが、ソ連崩壊後の市場経済化によって隣国の中国から安価な苛性ソーダ石鹼が大量に出回り、衰退していった背景がある。石鹼ひとつを取ってみても、大きな変化を経験しているのだ。

このアラバタ石鹼は生成方法と商品の点でも苛性ソーダ石鹼より優れている。薬草を乾燥させ、燃やした灰（アルカリ性）と牛脂やヤギ油（酸性）を自然に反応させて石鹼を作るので、劇物である苛性ソーダを必要としない。しかも、中性に近い。生産は村人の手作業で行なわれているので、作り手にとっても安心だ。また、苛性ソーダ石鹼のように1ヵ月も寝かせる必要はなく、作ってすぐに販

売、現金収入を得られることのメリットも大きい。この活動の目的は、一村一品という手段を用いて生計を安定させることであり、アラバタ石鹼の登場は理にかなっているといえる。

商品開発に目処が立つと、次に必要なのは販路開拓だ。タスマ村は都市から離れた遠隔地なので、どれだけ良いモノを作っても、売り手と買い手が集う場所、すなわちマーケット（市場）が存在しなければ意味がない。最も近いのは車で1時間ほどの地方都市カラコルで、次に首都ビシュケクが挙げられる。2011年に入ると、カラコルとビシュケクに安定した販路を確保でき、生産量と売上も安定した。

以上がタスマ村での一村一品活動の概要であるが、この主体となったのは誰なのか記しておきたい。この活動（プロジェクト）のアイデアを提供し、マネージメントを務めたのは協力隊員であることに間違いない。しかし隊員は赴任期間中、トップダウン方式で物事を進めることはせず、メンバーが主体となって活動できるよう尽力していた。それには彼



写真3 商品化した石鹼

らにオーナーシップを取らせることで、自立心を養ってもらい、その精神を他の場面でも役立ててもらおうという明確な意図が隠れていた。そんな隊員と一村一品運動を、メンバーはどのように感じていたのだろうか。いくつか列挙しておく。

A氏「タスマ村になかったものが、ボランティアによって持ち込まれ、私たちは石鹸作りの仕事をみつけることができた。私たちだけでなく、次世代にも引き継いでほしい。」

B氏「仕事をもつことで、一日の時間の使い方が上手になり、仕事がなかった時よりも家事をたくさんこなせるようになった。」

C氏「仕事仲間が家族のようになり、なんでも相談できる癒しの場になった。」

ソ連時代、モスクワの指導部による計画経済のもと、構成各国は指示どおりのことをこなし、それに見合った分配を受けていた。それはそれで良かったのかもしれない。しかし、今はもう誰も面倒をみてはくれない。クルグズスタンの国レベルも地方レベルもひとりひとりの国民レベルでも、自分で考えて行動しなければ生きていけないのだ。未だ指示待ち感を拭えないこの国の現状を打開するために必要な「何か」を、私はこの小さな村での活動に見出した気がした。